



Title	大阪方言アクセントにおける二拍5類語の現在 : 三世代話者の読み上げデータからのケーススタディ
Author(s)	武田, 佳子
Citation	阪大日本語研究. 2009, 21, p. 109-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8169
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪方言アクセントにおける二拍5類語の現在 —三世代話者の読み上げデータからのケーススタディー—

Class 5 bimoraic nouns in accents of Osaka dialect:
Case study of data on readings by speakers of three generations

武田 佳子
TAKEDA Yoshiko

キーワード：大阪方言アクセント、二拍5類名詞、拍内下降、アクセント変化

要旨

大阪方言アクセントの変化の一つに、若年層における二拍5類名詞と二拍4類名詞の合流傾向があり、その原因として二拍5類名詞の拍内下降の消滅が指摘されている。大阪市南部生え抜きの70代から10代の話者10名（1935年～1993年生まれ）に読み上げによる調査を行ったところ、拍内下降の有無は中年層を境に二分され、拍内下降を持たない中年層の話者は、二拍5類名詞に高起語が続く場合には、前接名詞の語末拍と後接語の1拍目の高さに微妙な差をつけていた。この音調は、拍内下降を持つ中高年層でも使用されていた。また、拍内下降をもつ中高年層話者全員にも、二拍5類名詞の出現環境によっては、若年層に見られるような5類名詞と4類名詞の音調的交替と思われる現象がみられた。

1. はじめに

近年、若年層におけるアクセントの変化が種々報告されている。だが、一番目立つのは若年層であるにしても、最初は目立たなかった現象が時間をかけ世代を超えて徐々に拡大して多数を占めるようになり、結果として若年層に特徴的なものととらえられるに至った可能性も高く、何代かにわたる調査が必要だろう。

また、これまでのアクセント研究は単語を中心に行われ、変化についても「単語のアクセント変化」についての報告が中心であったが、平山輝男（1957）でも、二文節以上からなる派生節を観察することの重要さが指摘されている¹⁾ように、日常会話においては、ことばは常に文や句として単語同士が前後関係を持ちながら使われ、その中で変化が生じるのであるから、観察する際にも単語単位の調査だけではなく、その出現環境を拡張して観ることも不可欠と思われる。

大阪方言アクセントについて、先行研究で報告されている若年層における変化の一つに

「拍内下降の消滅」がある。伝統方言アクセントにおいても助詞が後接した場合には起こらないとされている拍内下降であるが、大阪方言の場合、日常会話では「が」や「を」の格助詞は省略される方がむしろ普通なので、伝統的には拍内下降を持つとされる語を含む文節の音調は、拍内下降を保持していた世代と、拍内下降を持たない世代において異なっていると考えられる。しかし変化の一般的なプロセスを考えると、拍内下降をしっかりと保持している世代のすぐ次にまったく持たない世代が現れるのではなく、その間には必ず中間的な世代もいるはずである。そして拍内下降を完璧に保持している世代とまったく持たない世代は、具体的な音調は違っても双方とも安定した自分たちの音調を持っていると考えられるのに対し、中間的な世代は不安定な部分を持っていることが予想される。先行研究によれば、1960年前後生まれの世代から拍内下降を急激になくしているという。本稿では1930年代生まれから1990年代生まれの話者による読み上げ結果から、二拍5類型²⁾名詞を中心に、関連すると思われる二拍4類型名詞もあわせて、その現状を考察する。

さまざまな面で複雑化している現代社会では、変化の理由も一つではないだろうが、二拍5類型名詞を含む文節について、3世代の音調パターンを検証することにより、拍内下降を持たなくなったために生じたと考えられる大阪方言アクセントの変化の一つの方向性についての考察を試みる。

2. 先行研究

2.1. 変化に関する先行研究

大阪方言アクセントにおける二拍5類型名詞に関する調査としては、杉藤・奥田(1980)、岸江(1997)、田原ほか(1998a)、田原ほか(1998b)などがあげられる。それらの研究では、単語単独の読み上げで拍内下降があるものを「伝統型」、拍内下降がないL2の音調のものを「新型」として出現割合が示されている。表1はそれらの先行研究と、それらを踏まえてまとめられた研究として田原・村中(2000)における二拍5類型名詞についての伝統型と新型の出現割合を調査別にまとめたものである³⁾。表1では、被調査者の年齢は現在の年齢に換算している。

(1) 杉藤調査：杉藤・奥田(1980)

調査対象者：1975年～1978年当時で50代以上、20-40代、中学生以上の10代、小学生の4世代216名。

調査地域：中河内(東大阪市・八尾市)および南河内(富田林市・河内長野市・南河内郡)

(2) 岸江調査：岸江（1997）

調査対象者：1996年当時で40代から10代までの男女60名。

調査地域：大阪市内

(3) 大阪調査：田原ほか（1998 a）

調査対象者：1991年当時で60代以上から小学5年生の男女20名。

調査地域：大阪市内

(4) 東大阪調査：田原ほか（1998 b）

調査対象者：1997～98年当時で60代以上から20代までの男女51名。

調査地域：東大阪市内

【表1 先行研究による世代別の拍内下降の使用状況】

		80代以上	70代	60代	50代	40代	30代
(1)	伝統型	9割以上				7割台	3割(中河内)・6割台(南河内)
	新型	1割以下				2割	5割(中河内)・2割台(南河内)
(2)	伝統型				7割以上	皆無	
(3)	伝統型		8/8		3/4		1/7
	新型				1/4		4/7
(4)	伝統型		90%	89%	95%	31%	0%
	新型		5%	8%	3%	64%	94%

表中(3) [大阪調査] の数字は人数

これらの調査は10年前から30年前のものであるが、いずれの調査でも、現在の40代と50代のあたりに大きな変化が読み取れるものになっている。30代のデータが、30年前の杉藤調査の結果と、10年前の東大阪調査で大きく異なっているが、杉藤調査の対象者は30年前にすでに小学生であり、10年前に20代であった東大阪調査より年長者が多いであろうことを勘案してもなおかつ大きすぎる差である。憶測の域を出ないことではあるが、子供のころに拍内下降を持っていた人たちが長ずるに従って拍内下降を失っていったとも考えられるのではないだろうか。

大阪調査、東大阪調査では新型の特徴として、助詞を介さずに高起語が続く場合に二拍5類の語もLL・Hとなり、二拍4類と同じ音調になることが指摘されている。また中間型として、二拍名詞の1拍目と2拍目の高さは確実に異なる、LM・Hというべき音調を使う人も見られ、それらの人には聴覚印象として名詞の2拍目と述語1拍目の間にごく短い声門閉鎖（グロツタルストップ）が聞かれるとしている。

2.2. 伝統方言における拍内下降

拍内下降は、実際の会話の中でどのように現れるのだろうか。伝統方言話者世代である和田実氏の内省をもとにした資料から、二拍5類名詞の拍内下降は会話の中ではどのように使われているかを見てみる。和田（1944）は谷崎潤一郎の小説『猫と庄造と二人のをんな』の会話文を抜き出し、和田氏が内省した音調を付記したものである。この資料は「見かけの時間」ではなく「実時間」の変化をみられる点で、大変貴重なものである。『猫と庄造と二人のをんな』では猫が重要な役割を果たしており、会話に「猫」という語が何度も出てくる。現在の大阪では「猫」は、1拍目が高く2拍目が低いHLの音調で言うのが大勢であるが、かつては1拍目が低く2拍目に拍内下降を持つ音調LFの語であり、現在でも周辺部出身の中高年層ではその音調を使う人も見受けられる。和田氏は登場人物により「猫」のアクセントをLFとHLで切り替えているが、6名の登場人物のうちHLの「猫」を使うのは、問題の猫に思い入れのまったくない1名のみである⁴⁾。表2は、HL以外で「猫」が言われている場面での、後接語別の「猫」のアクセントである。

【表2 後接語別の「猫」の音調】

「猫」の音調	後接語		
	高起語	低起語	順接助詞
LH		4	9
LF	5	1	

表2から、和田氏の世代においては、文中で拍内下降が使われるのは主に高起語が後接した場合であるが低起語が後接した場合に使われることもある一方、順接の助詞が後接した場合は拍内下降は失われ、LHの音調になることがわかる。

2.3. 現在の若年層における二拍5類名詞のアクセント

郡史郎（未定）によれば、二拍5類名詞の音調形は「もっぱら単独発話がLH、順接助詞付き形はLH-L」⁵⁾であるが、それは伝統的なLF～LH-LまたはLF-Lから変化したもので聴覚的印象は大きく異なるものの、低起式で2モーラ目に核があるという音韻的特徴は変わっておらず、音声としての表現が少し変化しただけであるとしている。同時に、文中で助詞なしで高起語が後接する場合には二拍5類名詞の音調形はLLになり、同じ環境における二拍4類語との区別がないが、一部の若年層話者においては、その語にフォーカスがある場合にはLHで発音され、二拍4類名詞とは音調形に差が表れることを指摘している。

【表3 環境別に見た若年層の二拍5類および相当語の発音傾向】

(郡(未定)の表3および表4より抜粋して作成)

	名詞単独	名詞 + ガ・オ -	名詞 + 高起式の語 (「見た」など)	名詞 + 低起式の語 (「見える」など)
4類 (「空, 海, 船」など)	LH	LH-L	LL#H…	LH#L…
5類 (「雨, 猿, 窓」など)	LH	LH-L	LL#H…	LH#L…

は文節境界を示す)

郡(未定)では、上記のように環境によって音調形が異なる理由として、「文レベルの規則、つまりこの文環境が要求する音調規則が変わった」と考え、語にフォーカスがある場合には、文レベルの規則の適用をフォーカスが阻止するためとしている。

3. 調査方法

3.1. インフォーマント

大阪市南部(阿倍野区・住吉区・東住吉区・平野区・西成区)生え抜きの、70代から10代の男女計8名に調査文の読み上げをお願いした。各インフォーマントの詳細は表4に示すが、高年層(1935～6年生まれ)2名、中年層(1952年生まれ)5名、若年層(1991～3年生まれ)3名である。大阪市南部は、北摂部や阪神間に比べれば他地方からの移住者は非常に少ない。また長年にわたり住民の入れ替わりも極端に少なく、宅地の取得は数年がかりでも困難な地域もあると聞く。それが大きな原因かと思われるが、方言に関してはかなり保守的な地域で、先行研究で報告されている他地域に比べれば、若年層においても伝統方言を保持している率が高い。そういう地域であっても、現在の社会においては他方言との接触は避けられないが、比較的他方言の影響が少ない環境下での3代にわたるデータを取得できると考えている。

【表4 インフォーマント一覧】

		S1	S2	M3	M4	M5	M6	M7	Y8	Y9	Y10
本人	生年	1935年	1936年	1952年	1952年	1952年	1952年	1952年	1992年	1991年	1993年
	生育地	大阪市 阿倍野区	大阪市 西区・ 阿倍野区	大阪市 平野区	大阪市 住吉区	大阪市 阿倍野区	大阪市 東住吉区	大阪市 西成区	大阪市 東住吉区	大阪市 阿倍野区	大阪市 阿倍野区
	性別	男性	女性	男性	男性	女性	女性	男性	女性	女性	女性
父親	生年	1903年	1912年	1923年	1919年	1924年	1920年	1927年	1959年	1951年	1960年
	生育地	山口県 岩国市	大阪市 天王寺区	大阪市 平野区	大阪市 中央区	神戸市・ 大阪市	大阪市	大阪市 西成区	大阪市 東住吉区	大阪市 阿倍野区	大阪市 阿倍野区
母親	生年	1912年	1912年	1926年	1925年	1927年	1917年	1929年	1963年	1952年	1960年
	生育地	山口県 岩国市	京都市	大阪市	大阪市 住吉区	大阪市 住吉区	大阪市	香川県 高松市	奈良県 桜井市	和歌山県 田辺市	神戸市・ 大阪市
配偶者の 生育地	東大阪市	岡山県 和気郡	大阪市 生野区	大阪市 西成区	大阪市 阿倍野区	岐阜県 関市	岡山県 岡山市				
祖父母との 交流				小2まで 母方の祖父と、大 1まで父 方の祖母 と同居。		なし。	ほとんど なし。	父方の祖 母と同居、 母方の祖 父母は住 吉区在住 で月2～ 3回会う。	父方の祖 父母は存 命中は近 所に居住。 母方の祖 母とは年 1回程度 会う。	月1回程 度会う。	

3.2. 調査データおよび調査方法

調査用に発表者が作成した文を読み上げてもらった（1回のみ）。読み上げに際しては「大阪方言の調査」とのみ伝え「親しい友人や家族と話しているつもりで」とお願いした。読み上げ文には次の2種類を用意した。

(1) タイプ1

日常会話風の文。内容的にも文そのものも不自然にならないように留意しながら調査したい項目を含めた74文。

例：まわりがうるそうて、先生の声、聞こえへん。

あっちの猿、起きてるけど、こっちの猿、寝てるわ。

読み上げ文には5種類の二拍5類型名詞について、後接語を次のように設定し、その接続部分の音調をみた。

使用した名詞（5語）：声・鍋・猿・地図・幾何

後接語（4種類）：一拍順接助詞

二拍助詞「から」⁶⁾

高起語

低起語

使用語彙などでインフォーマントが不自然に思う場合には、インフォーマントにとって自然な形に変更して読み上げてもらったが、指摘されたのは本稿での調査項目には関係しない助動詞やウ音便ばかりであった。(「焦がしてしもた」→「焦がしてもた」、「うるそうて」→「うるさくて」)

(2) タイプ2

二拍5類型名詞に、「が」「を」「から」「より」「ほど」の5種類の助詞をつけた文節の読み上げ文。

使用した二拍5類型名詞（5語）。

秋・赤・青・雨・夜

一拍の順接助詞だけでなく、「から」⁶⁾「ほど」(順接)「より」(低接)の3種類の二拍助詞との接続規則についてのインフォーマントの認識を確認するために用意した。

例：秋　秋が　秋を　秋から　秋より　秋ほど

4. 読み上げ結果の分析

4.1. 分析方法と用語

4.1.1. 分析方法

読み上げ結果の聞き取りは、使用された音調の各拍の高さを、その前後の拍との相対的な関係で識別して、「高」と「低」に二分することを基本とした。拍内下降については、次の音調的特徴を判断基準にした。

- (i) 「低」で始まり、1拍目と2拍目には明確な高低差がある。
- (ii) 2拍目は「高」で始まり、音を下げながら、母音を引きずるように伸ばす。
- (iii) 2拍目は、聴覚印象でも明らかに1拍目より長い。
- (iv) 語全体としては、2拍目の最初を頂点に、「へ」の字を裏返したような山形の音調になる。

上記の要件を満たしている場合、拍内下降が使われているとみなし、その拍には「F」の表記を使用した。また、1拍目と2拍目の高低差も、2拍目の引きずるような下げの高低差も比較的小さく、全体的に弱化した印象があるが上記の要件を満たしている拍には、典型的な拍内下降とは区別して、「f」の表記を用いた。

本稿では、伝統的には二拍目に拍内下降がある二拍5類型名詞の、中年層における現状の考察を目的としているため、拍内下降に関連する音調として、次の場合については、「高」を2段階に区分した。

- ① 名詞部分の2拍目の「高」と後接語の「高」の拍が連続し、その双方の「高」が聴覚印象として明らかに高さが違う場合は「高めの高」(#H)、「低めの高」(^bH)として、違う高さとして識別した。
- ② 名詞部分の1拍目と後接語の1拍目が「低」である場合で、聴覚印象として名詞部分の2拍目が明確な「高」ではないが「低」でもない場合、「高めの低」(#L)として、違う高さとして識別した。

読み上げに現れた高低には、アクセント以外の要素も加わっていることを前提として考えなければならない。このH、L、F、fによる表記は、表層として現れた音調を聞き取ったままに記述したもので、音韻的解釈を加えた結果ではない。アクセントを考察する元のデータとするものである。これらの高さの違う「高」「低」の音韻的な位置づけについては第5章で考察する。

4. 1. 2. 用語について

本稿では、インフォーマントの読み上げに使われた高低を聞き取ったままにLやH等で表記した音調を、郡(未定)にならい「音調形」と呼ぶ(注5参照)。つまり「音調形」は表層の高低を記号で書き表したもので、音韻的性質であるアクセントを考察するための基礎となるデータである。一方「アクセント型」は、その話者が認識している、もしくは大阪方言アクセントとして認識されている、一つの語もしくはある語群についての高低のパターンのことで、音調形を音韻論的に整理し導き出されたものをいう。読み上げデータの中で、二拍5類型名詞およびその後接語ではなく、なおかつ大阪方言において安定した音調が使われていると判断した語については、音調形の高低をアクセント型として扱う。

4. 2. 文中における二拍5類名詞と後接語の音調

4. 2. 1. 調査文節および連文節の種類と出現回数

タイプ1の読み上げ文中に含めた、伝統的には拍内下降の音調を持つ「声・鍋・猿・地団・幾何」の5語と、設定した4種類の後接語との出現回数は表5に示した24回である。

【表5 調査語と後接語の種類】

	後接語				
	助詞		助詞なし		
	一拍順接助詞	から	高起語	低起語	
声	1	は		2	1
鍋	2	を・を		1	1
猿			1	3	1
地図	2	を・が	2	1	1
幾何	2	が・は	1	1	1

4.2.2. 助詞を介した場合の音調

(1) 一拍順接助詞の場合

一拍順接助詞が後接した場合は、Y9さんが1例LL-Hを使用していた（「ここに地図があるわ。」）以外は、すべてLH-Lの音調形であった。しかし、使用された音調形が同じであるということが、高年層から若年層まで同じように伝統方言を保持しているということであるとは限らない。郡（未定）によれば、若年層においては二拍4類名詞と5類名詞を区別せず、音調は環境次第で決まる傾向にあるという。筆者の調査でも同様の結果を得ている。ここでは「若年層の1例を除くすべての場合にLH-Lが用いられた」という事実を確認するとどめ、詳しくは第5章で考察する。

(2) 二拍格助詞「から」の場合

伝統方言においては「から」は順接の助詞で、二拍5類型名詞に後接するとLH-LLの音調形になり、二拍4類型の語に後接した場合は「から」に後接する語の1拍目の高さによりLL-LHかLL-LLであった。しかし現在では、個人差もあるが、二拍4類型名詞などの無核語に後接した場合、「から」はHLの音調になる現象が顕著である。用例数は少ないが、文中（タイプ1）で二拍5類型名詞に「から」が接続した場合、高年層と中年層では伝統方言どおりのLH-LLのみあるが、若年層においてはLH-LLとLL-HLに二分された。表6は文中（タイプ1）における二拍5類型名詞に「から」が後接した場合に使用された音調形をまとめたものである。

【表6 二拍5類型名詞に「から」が後接した場合の音調（文中）】

「名詞-から」の音調形	S1	S2	M3	M4	M5	M6	M7	Y8	Y9	Y10
LH-LL	3	3	3	3	3	3	3	1		3
LL-HL								2	3	

使用した語：猿・地図・地図

4.2.3. 助詞を介さない場合の音調

助詞を介さない場合の二拍5類型名詞と後接語の1拍目の音調を、「高」「低」の2種類の高さだけでなく、聴覚印象として異なる高さ聞こえるものを違う高さとしてとらえると、使用されている音調形として下記の9種類のものあげられる。(Fは拍内下降、fは高さも下降度も弱化した拍内下降、HやLの前にある#は「少し高め」、^bは「少し低め」を表す。)

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| ① LF-H | ⑥ LF-L |
| ② Lf-H | ⑦ L ^b H-L |
| ③ L ^b H-#H | ⑧ L#L-L |
| ④ L#H- ^b H | ⑨ LH-L |
| ⑤ LL-H | |

これらは主に前後の拍との相対関係をもとに、筆者の聴覚印象で判断した高低であるので、たとえば①と②の後接語1拍目のHを比べるとか、①や②のHと③の^bHや#Hとを比べるとというような観点からの比較は考えていない。

表7は、文中の助詞を介さない場合の二拍5類型語と後接語の1拍目の音調形をインフォーマント別にまとめたものである。

【表7 助詞なしの場合の二拍5類型の語と後接語1拍目の音調形】

	S1	S2	M3	M4	M5	M6	M7	Y8	Y9	Y10
① LF-H	3	4	3	3		5	4			
② Lf-H	1	2	4	3						
③ L ^b H-#H		1			3	1	1			2
④ L#H- ^b H				1	1	1		1		
⑤ LL-H	3	1			3		4	6	7	6
⑥ LF-L	2	2	3	2		1	1	1		
⑦ L ^b H-L				1	1					1
⑧ L#L-L	1						1			
⑨ LH-L	4	4	4	4	6	6	3	6	7	5

表7で、若年層のY8さんがLF-Lを1回使用しているが、Y8さんはアクセント句末の拍を卓立させたあと引きずるように下降させる読み癖があるので、その音調がたまたま二拍

5 類型語の語末に出ただけである可能性が高い。そのことも含め、これらの音調形は、アクセントとそれ以外の要素が重なり合った結果の表層的なものである。拍内下降も含め、これらの音調形についての音韻的な考察は5章で行う。

4. 3. 文節読み上げでの二拍5 類型名詞と助詞の音調

表8は、日常的にもよく使用する二拍5 類型名詞「秋・赤・青・雨・夜」の5語について、それぞれの言い切り形と「が」「を」「から」「より」「ほど」を後接した6文節の読み上げ結果をまとめたものである。

【表8 文節読み上げにおける二拍5 類型名詞と助詞の音調形】

	使用された音調形	S1	S2	M3	M4	M5	M6	M7	Y8	Y9	Y10
言い切り	LF	4	5	3	5			3	1		
	LH	1		2		5	5	2	4	5	5
-が	LH-L	5	3	5	4	4	5	4	5	5	5
	LF-L				1						
	LL-H		2			1		1			
-を	LH-L	5	2	5	5	4	5	4	5	5	5
	LL-H		3			1		1			
-から	LH-LL	4	3	3	4	4	5	4	1		
	LL-LH	1									
	LL-HL		2	2	1	1		1	4	5	5
-より	LH-LL	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5
	LL-HL										
-ほど	LH-LL	3	4	5		3	4	4	2		
	LF-HH				5						
	LL-LH	2	1			2		1	3	4	5
	LL-HH						1			1	

限られた語数ではあるが、言い切り形では高年層と中年層の男性2名（M3さん、M4さん）が拍内下降を持っていることが分かる。特にM4さんは「ほど」が後接した文節では、非常にはっきりした拍内下降があり「ほど」を高2拍で続けているのが特徴的である。

文の読み上げでは、二拍5 類型名詞に順接一拍助詞が後接した「声は・鍋を（2回）・地図を・地図が・幾何が・幾何は」を全員がすべてLH-Lで言っていたが、文節だけを抜き出すと、LH-Lが多数を占めるものの、人によっては不安定になってきている。同様に、文中では格助詞「から」が後接した3例は、高年層と中年層は全員LH-LL、若年層は1例

を除いて全員がLL-HLで（表5参照）、それが伝統方言型かどうかはともかく、安定していたが、文節だけになると全員にゆれがみられる。しかも、中高年層においては「若年層型」とでも言うべきLL-HLが増えてくるということは非常に興味深い。

5. 考察

5.1. 文中における二拍5類語の音調

二拍5類名詞は、伝統的には、語末に核を持ち、単語のみの言い切りの場合や助詞を介さず自立語に前接した場合は2拍目に拍内下降を持つLFのアクセント型になり、順接の助詞を介した場合には拍内下降は消えLHになるとされる語である。今回の調査結果を、助詞が後接した場合と助詞なしで自立語に前接した場合に分けて考察する。

5.1.1. 助詞が後接した場合

今回の調査では、4.2.2. と 4.3. で見たように、順接の一拍助詞が後接した場合にはどの世代でもLH-Lの音調でほぼ落ち着いているといえる。そのことだけ見れば世代間での違いはないように見えるが、二拍助詞「から」が後接する場合、若年層ではLL-HLが多く使用されること（4.2.2. 表6）と合わせて観察すると、高年層・中年層と若年層では二拍5類型名詞の音韻的性質が異なっていることがわかる。伝統方言では二拍5類型名詞は語末に核を持ち、「支配」以外の助詞が後接した場合に無核化することはないが、若年層の読み上げ結果からは、順接の一拍助詞が後接した場合は伝統方言と同じ音調形が使われているが、二拍の格助詞「から」が後接した場合は無核の音調形が使われることも多い。詳細は郡（未定）で報告されているが、若年層においては、二拍5類型名詞は二拍4類型名詞と合流する形で、新たな音韻的性質を持つようになっている。しかし、武田（2008）で指摘したように、二拍助詞「から」にも音韻的性質の変化がうかがえるため、変化について語るためには慎重な調査が必要である。

5.1.2. 助詞を介さない場合

(1) 音韻的解釈と表記について

助詞を介さない場合に使用されたのは下記の9種類の音調形である。

- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| ① LF-H | ⑥ LF-L |
| ② Lf-H | ⑦ L ^b H-L |
| ③ L ^b H-#H | ⑧ L [#] L-L |
| ④ L [#] H- ^b H | ⑨ LH-L |
| ⑤ LL-H | |

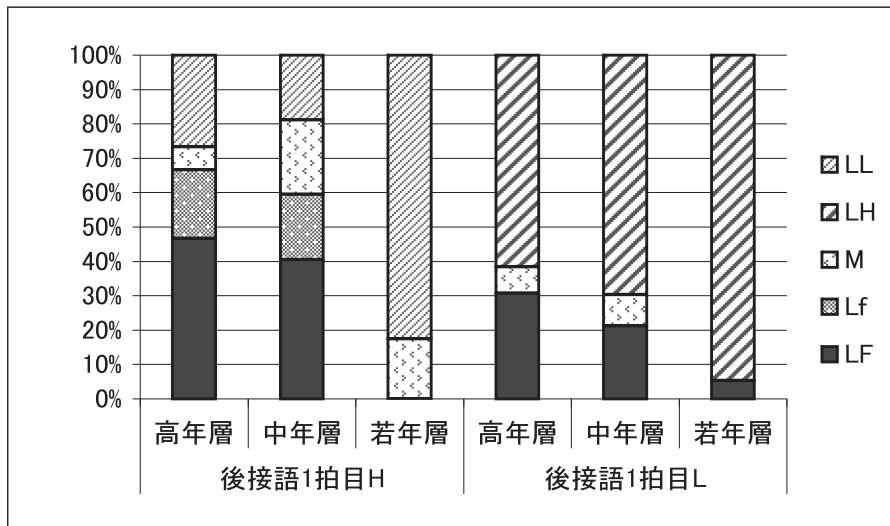
典型的な拍内下降の①⑥と、弱化した拍内下降の音調形である②以外の6種類の音調形は、LとHの2つの高さだけから成る⑤⑨と、LとHの中間的な高さを含んだ③④⑦⑧とに大別できる。アクセントを考える場合、通常は微妙な高低の差は捨象してすべての拍をHとLの2つの高さに区分するが、拍内下降は1つの拍の中で高さに変化する音調であり、上記③④⑦⑧はその拍内下降の拍の位置とそれに続く拍で使用されていることや、複数のインフォーマントに使用されていることを考えあわせると、中間的な高さも音韻的に有意なものである可能性が高いと思われる。しかしそれらの中間的な高さがHとLのどちらにより近いかの判断は聴覚印象であり、また音韻的な考察においては、実現形式として認識した「^bH」や「[#]L」ではなく「中間の高さ」という概念的な高さを設定すべきであると考えられるため、以下の考察においては「低」「高」「中」の3種類の高さを設定し、音調形を音韻的に解釈した場合は下記の表記を用いる。

音調形		音韻表記
③ L ^b H-#H	→	LM-H
④ L [#] H- ^b H	→	LH-M
⑦ L ^b H-L / ⑧ L [#] L-L	→	LM-L

(2) 世代別の二拍5類型語とその後接部分の音調

読み上げで使用された二拍5類型名詞と後接語の1拍目の音調を、表7をもとにグラフにしたのが図1である。図1では、音調形に中間的な高さが使用されている③④⑦⑧については「M」として1項目にまとめているが、後接語の1拍目については音調形の表記に従い、③④については「H」に、⑦⑧については「L」に区分している。また、インフォーマントの人数が異なるため、各音調の数値は実数ではなく割合で示している。

図1から、若年層は後接語がHであればLL-H、後接語がLであればLH-Lというパターンでほぼ安定していることが分かる。「後接語1拍目L」の若年層でLFが使われているが、これはY8さんのデータで、Y8さんの当該部分（「あっちの猿、起きてるけど」）の音調は拍内下降そのものであった。しかしY8さんにはアクセント句末を卓立してから引きずる



【図1 二拍5 類型名詞の世代別音調】

ように下降させる読み癖があり、たまたま二拍5 類型語の語末にその癖が重なった結果の可能性が高い。そのため、若年層でも拍内下降を持っていると考えるのではなく、若年層は後接語がLで始まる場合は二拍5 類型語はLHで安定していると考えべきと判断している。

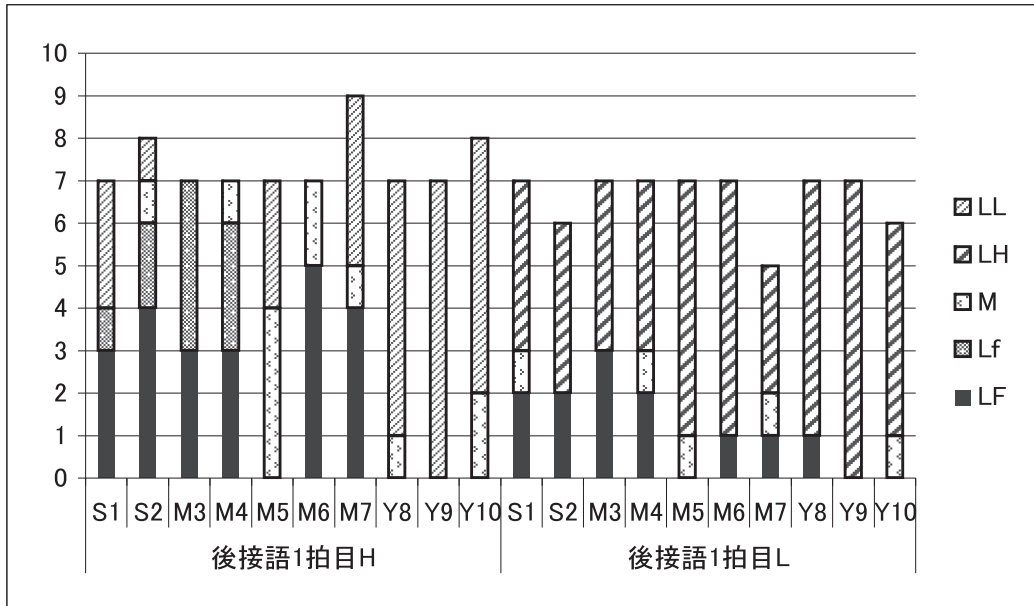
中年層を高年層と比較すると、後接語がLの場合は拍内下降が減った分LHが増え、後接語がHの場合は拍内下降とLLの少ない分、中間的な高さを使う割合が増えていることがわかる。また図1を見る限りでは、後接語がHの場合に最も使われる音調の種類が多いのは中年層で、伝統方言を保持している部分を持ちつつもかなりゆれている世代であるともいえるだろう。

(3) 個人別の二拍5 類型語とその後接部分の音調

次に、図2に個人別の二拍5 類型語とその後接部分の音調をグラフで示す。左の数字は、その音調が使われた実数である。後接語は、大阪方言では標準的には高起式が使われる語と低起式が使われる語を各7語ずつにしたが、人により使用する音調は必ずしも同じではないため、後接語のHとLの数は人によって少し異なっている。

個人別にみると、若年層は比較的個人差が少ないのに対し、高年層と中年層は人により、かなり異なった傾向を示していることが分かる。中年層と高年層の7名を見ると、M5さん以外は拍内下降をよく保持しているといえるが、同時に若年層に多くみられるLLや中間的な音調の使用もみられる。中年層の中で唯一他の人と異なった傾向を示し、若年層的であるのがM5さんである。M5さんは拍内下降は使用していない一方で、高起語が後接し

た場合には、他の中年層の拍内下降使用数に相当する数の中間的な音調を使用しており、M5さんの使用している中間的な音調がLLになれば、まったく若年層と同じになる。状況証拠ではあるが、M5さんの使用する音調が中年層と若年層の中間に位置するものである可能性が高いと思われる。



【図2 二拍5類型名詞の個人別音調】

(4) 代替的音調

拍内下降を持たない話者が使用している中間的な音調には、拍内下降の特徴を代替する役割を果たしていると考えられるものがある。高起語が後接語であった場合に、語末の高の拍と後接語の1拍目に差をつけるため、一方を少し高く、もう一方を少し低くしている「LM-H」「LH-M」という音調である。内省では筆者自身もこの音調をよく使用していると思うが、その根底には、二拍5類型の語の2つの拍には「低-高」という相対位置関係をつくり、名詞の2拍目と後接語の1拍目には高低差をつける、という意識が働いていると考えている。LM-HとLH-Mのどちらを使うかは、前接の名詞部分と後接語のどちらをより重要と考えているかによって決まると思うが、読み上げのように、自分の思い入れがある発話ではない場合には、後接語が有核か無核かによって使い分けられているようである。後接語が有核語の場合は1拍目の後でまだ下がるため、無意識のうちに高さを確保し、後接語が無核の場合には最初の拍と同じ高さを続けるので、高い音より少し低めの方が好都

合なのかもしれない。

このLM-HとLH-Mに相当する音調は、大阪方言では日常的に多用されている。たとえば、今回の読み上げ文の中でも、二拍5類型名詞を含んでいない次のような読み上げ文においても使用されている。

- ・前の道、水道工事で 穴 掘ってたわ。
(LH-L-^bHH #HHHHHLL-L LH LLHL-L)
- ・小さい子は、親のそばがええんやわ。
(HLLL-^bH-H #HH-H-LL-H LHL-L-L)

これらの場合、「道」や「子は」はLで言われることも多いと思われる。「道」も「子」も、大阪方言では安定して高起無核の語であるが、文構造の関係から、「道」よりも「水道工事」、「子」よりも「親」を目立たせようとして、そのような音調になるのだろう。強調により高さが変わるとすれば、イントネーションの要素ということになる。

では、拍内下降の代替音調と考えられるLM-HとLH-Mをどう位置付けるのかが問題になる。私見では、拍内下降の代替音調は、文構造やその場の状況とは関係なく、常に隣接する拍同士の高低の相対位置関係を保持することを目的としていることから、アクセントとして機能していると考えている。しかし、LM-HとLH-Mの違いがフォーカスに関係しているとすれば、アクセントの要素もあわせ持っていると考えべきだろう。この中間的な音調は若年層ではほとんど使われていない。アクセントであるとしても、中年層から老年層に限定的なもので、時間経過とともに消えてゆくものであることは否めないだろう。自分では使わないにせよ、拍内下降の音調を記憶している世代であるがゆえに使用できる、微妙な音調であるのかもしれない。

(5) 弱化した拍内下降と不完全な「高」

中高年層における弱化した拍内下降とLM-LやLL-Hの使用状況を、読み上げ文の内容と関連付けて考察すると、一つの可能性が指摘できる。二拍5類型の語を含んだ次の3つの読み上げ文で、弱化した拍内下降とLM・LLが多用されている。

- ・周りがうるそうて、先生の声、聞こえへん。
- ・この前、鍋焦がしてしもたから、今日、新しい鍋、買うてきてん。
- ・あっちの猿、起きてるけど、こっちの猿、寝てるわ。

「声」はLL-HとLf-Hが3名ずつ、LF-Hが1名、「鍋」は最初の方がLF-H 2名、LF-L 4名、LH-L 1名に対し、後の方はLL-Hが4名、Lf-Hが2名、LF-Hが1名、「猿」は最初の方は

LF-Lが2名、LM-Lが4名、LH-Lが1名に対し2回目の方はLL-HとLf-HとLF-Hが2名ずつとLM-Hが1名であった。後接語の式など、環境が違うため、単純に比較できない部分もあるが、これらの文章では先に説明部分があるため、文章の後半になると名詞部分より後接している動詞が重要視され、結果として名詞部分は弱化してしまうと思われる。とすれば、これはイントネーションによる弱化と見ることができるだろう。

イントネーションで高さが抑え込まれたものであるとしても、LM-Lには別の可能性も指摘できると考えている。この音調が何らかの理由でもう少し抑えられるとLLの音調になるものと思われる。LLの音調は高年層の話者もかなり使っているが、高年層の場合はイントネーションによるもので、自己のアクセント体系の中に「二拍5類名詞のLL」は存在していなくても、前後のつながりなどの関係で生じる、いわば「雑な発音」の結果である可能性が高いと考えられる。それに対し、若年層はLLをその語本来の音調と認識しているようである。中年層も、意識的には高年層と同じだと思われるが、音調の実現形として高年層よりも「高」の上りが少ないLM-Lを使用する傾向にある可能性もある。高年層や中年層がどのように認識しているにせよ、上の世代が音調の実現形としてLM-Lに相当する音調やLLを使用すれば、それを耳にする下の世代にその実現形を当たり前ものとして受け取るだろう。中・高年層のLM-LやLLが、若年層のLLとの連続体である可能性は否定できないだろう。

5.2. 話者の属性

5.2.1. 「実時間」と「見かけの時間」

今回の調査結果を見ると、現在の若年層で顕著に表れている変化とされている音調的特徴は、上の世代でも数は少ないがみられることがわかった。しかし、それらのすべてを高年層や中年層のインフォーマントが若い頃、若いころから持っていたものであるかどうかについては、軽々に判断できないと考えている。言語形成期ではなくても、日常的に若年層と接していれば、ある程度の影響を受けている可能性は考慮する必要があるだろう。今回お願いした高年層・中年層のインフォーマントは、子供や孫をはじめとし、日常生活で若年層と接触している環境の人ばかりであった。特にS2さんは染色教室の主催者、M3さんは高校の教員、M5さんも数年前に退職された高校の教員、M6さんは小学校の教員である。表面的な音調など、影響を受けているかもしれない項目における高年層・中年層に見られる若年層と共通する特徴については、そのことを踏まえ、他の資料も調査するなど、慎重に検討することが必要であろう。

5. 2. 2. 男女差

二拍5類型名詞という範囲だけではあるが、世代別に調査結果のデータを見ると、上の世代の女性と下の世代の傾向が似ている。若年層インフォーマントはたまたま全員女性であったが、調査結果としては高年層の女性と中年層の男性、中年層女性のM5さんと若年層3名のグループの特徴が似ている。各世代の人数も少なく、中年層女性でもM6さんは同世代の男性と似ているが、女性の変化をリードし、子供は母親のことばに影響を受けるという図式も垣間見える。世代差や変化のプロセスを考察する場合、インフォーマントに男女をそろえることの重要性を感じている。

6. まとめと今後の課題

大阪方言アクセントの変化として、拍内下降の消滅はかなり以前から指摘されており、拍内下降がなくなってしまったら二拍4類と5類の区別がつかなくなるのではないかとすることも同時に言われていたことである。現在の高年層は拍内下降を保持し、若年層はまったく持っていないという現状と、今回の調査結果から、中年層における二拍5類型名詞の音調を詳しく調査すれば、拍内下降消滅の音調的プロセスがある程度追跡できるのではないかと思われる。「アクセントは個々の語について、社会的習慣として決まっている」というのが常識であるが、若年層においては、二拍5類の語は環境によりアクセントが決まるという様相も見られる。本稿では詳しくは触れなかったが、二拍4類の語についても同様の現象がみられ、2つの語類が相関関係を持ちながら変化していることは確かである。また、現段階では二拍5類型・4類型名詞の変化に関与している程度はわからないが、2拍の助詞の音調も伝統方言とは異なってきている。さらに調査を進め、これらの変化について包括的に記述したいと考えている。

注

- 1) 「日本語の音調は、現代国語の特質の上からも、その観察ならびに研究は、基本節を中心に進めなければならない。(中略) なお、この基本節だけの観察にとどまらず、さらに進んで、派生節の観察を合わせ行うことによって、はじめて完全な音調研究の目的が達せられる。(中略) つまり、日本語音調の研究は、まず基本節のあらゆる場合を観察し、また派生節の観察を行わなければならないことを強調したい。」『日本語音調の研究』P.19～20
- 2) 本稿では、『日本語音調の研究』(金田一春彦 1974) による二拍4類名詞およびそれと同じアクセントの型を持つ語を「二拍4類型名詞」、二拍5類名詞およびそれと同じアクセント型を持つ語を「二拍5類型名詞」と呼ぶ。

- 3) 頭高型がみられる調査もあるが、割合も少なく「拍内下降の消失」とは直接関連しないため、表1には含めていない。
- 4) 「猫は上下型ネコと下上型ネコと両様のアクセントが併用されているが、ネコの方が方言色の濃い親しみ深い言い方である」(和田實 1944 1月号 P.47)
- 5) 郡(未定)では、HとLはモーラごとの相対的な感覚的高低の表記であり、そのHとLで表しうる音の高さの具体的な動きを「音調形」と呼ぶ、としている。
- 6) 伝統方言アクセントでは二拍助詞「から」は順接であったが、現在では無核語に後接した場合はHLの音調になり、順接とは言えないため、あえて接続の種類は記さない。

参考文献

- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2』明治書院
- 岸江信介(1997)「大阪市若年層にみられるアクセント変化」『西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究』平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』東京堂出版
- 郡士郎(未定)「大阪方言若年層の二拍名詞4類・5類のアクセントについての一考察—特に文中でのふるまいに注目して—」
- 真田信治(1987)「ことばの変化のダイナミズム—関西圏におけるneo-dialectについて」『言語生活』No.429
- 編(2006)『社会言語学の展望』(くろしお出版)
- 杉藤美代子・奥田恵子(1980)「中河内及び南河内における近畿アクセント〇〇型発話の実態」『大阪樟蔭女子大学論集』第17号 大阪樟蔭女子大学
- 武田佳子(2008)「大阪方言における格助詞「から」の音調変化についての一考察」『音声言語』近畿音声研究会(11月刊行予定)
- 田原広史・江川清・杉藤美代子・板橋秀一・中村和夫(1998a)『CD-ROM版音声データベースJCMD 大阪 添付資料』(重点領域研究『人文科学とコンピュータ』公募班『方言音声データベースの作成と利用に関する研究』研究成果刊行物)
- 田原広史・江川清・杉藤美代子・板橋秀一・中村和夫(1998b)『方言音声データベースの作成と利用に関する研究』(重点領域研究『人文科学とコンピュータ』公募班研究成果刊行物)
- 田原広史・村中淑子(2000)「大阪アクセントにおける二拍名詞Ⅳ類・Ⅴ類の統合について—20代から60代までの実態—」『徳川宗賢先生追悼論文集』
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』
- 牧村史陽編(1984)『大阪ことば事典』講談社
- 和田実(1944)「近畿アクセント—「猫と庄造と二人のをんな」を例に—」『国語文化』昭和19年1月号・2月号
- (1975)「アクセント イントネーション プロミネンス」『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版

(博士後期課程学生)

(2008年8月22日受付)

(2008年10月2日修正版受付)

(2008年10月20日掲載決定)